



モンゴル国の助産分野の本邦研修のご報告と 企画・運営を通しての学び

国立国際医療研究センター 国際医療協力局 人材開発部

研修課 助産師 高野 友花

本邦研修について

私が所属している国際医療協力局（以下、協力局）の人材開発部研修課では、協力局の5つの戦略のひとつである「国内外のグローバルヘルス人材を育成します」に基づき、外国人向けの研修や国際協力を目指す日本人向けの研修を実施しています¹⁾。外国人向けの研修のうち、日本にて実施する研修を本邦研修と呼んでおり、協力局では1986年から2022年までに147か国から延べ8,709人の研修員を受け入れてきました。本邦研修には、独立行政法人国際協力機構（以下、JICA）の技術協力の一環として実施されているものも多くあります。JICA 関連の本邦研修は、医療のみならず多様な分野で、全国の様々な委託機関によって実施されており、年間に1万人ほどの研修員を受け入れています²⁾。協力局も JICA 本邦研修の委託機関のひとつであり、本邦研修のうち

国別研修と課題別研修の委託を受け、実施しています。国別研修は、国ごとの課題に対する個別の要請に基づき実施されるもので²⁾、協力局では JICA が実施しているプロジェクト関係者を対象に実施することが多いです。課題別研修は、日本側で開発途上国の課題を想定して研修計画をし、複数国からの研修員を対象に研修を行います²⁾。COVID-19 のパンデミックの影響で、これらの研修もオンラインでの実施または実施しない場合もありましたが、今年度から本格的に訪日の研修が再開されました。本稿では、私が企画・運営を担当させていただき、9月20日から10月4日に実施された JICA モンゴル国（以下、モンゴル）のプロジェクト、「医師及び看護師の卒後研修強化プロジェクト」の助産分野の国別研修のご報告と、企画・運営にあたり考えたことや学びについて共有させていただきます。



モンゴル国立病院の外観



院内は可愛らしいイラストが多く印象的でした

モンゴルの助産分野の本邦研修

本研修は、新人助産師教育の計画立案に関与する行政官および国立系病院の管理者・助産師、地方の助産師8名を対象に、「新人助産師の研修プログラム」の原案を作成することを目的として実施されました³⁾。モンゴルでは、2023年8月に同プログラムと「助産師の卒後研修ガイドライン」作成のためのワーキンググループが設置されており、その関係者が本研修に参加しました⁴⁾。日本における助産師の役割、新人助産師教育を中心とした卒後継続教育に関係する施策及び行政機関、職能団体、医療施設における新人助産師教育の取り組みや組織間連携等について、講義や視察、実習を通して学びを深めました。どの研修先でも質疑応答が活発に行われ、研修員の方々の熱心に学ぶ姿が大変印象的でした。研修員の方々は、研修の集大成としてモンゴル国において安全で質のよい助産サービス提供のための「新人助産師の研修プログラム」の原案とプログラム完成に向けたアクションプランを作成し、研修最終日には発表会が実施されました。発表会では、これまでにプロジェクトに貢献くださった専門家の方々にもご参加いただき、貴重な意見をいただく機会となりました。モンゴルに帰国後は、ワーキンググループでも研修参加者によって「新人助産師の研修プログラム」の原案とプログラム完成に向けたアクションプランが発表されたと聞いています。

モンゴルの研修員の方々と日々過ごす中で、日本について再発見をしたり、モンゴルの状況について教えていただいたり、私自身にとっても大変刺激的で充実した日々となりました。また、普段であれば訪れることのない行政機関や職能団体、医療施設への訪問は、研修員の方々がいたからこそ経験できたことであり、大変有難い機会であったと感じています。どの研修先でも研修生を温かく迎え入れていただき、惜しみなく研修先での取り組みやご経験について共有いただきました。関係者の方々に深く感謝申し上げます。

研修の意義について考える

本邦研修には長い歴史がありますが、その効果について明らかにする研究はあまり実施されていません。協力局ではこれまでに様々な本邦研修を受け入

れているということもあり、本邦研修の効果を評価する研究を実施しています。私も研究班に属しており、2023年の3月末、8月末に研修効果を評価する研究のため、モンゴルに渡航する機会をいただきました。首都のウランバートルに滞在し、日本での研修に参加された医療従事者の方々に調査を実施させていただきました。結果はまだ分析中ですが、調査を通じて、本邦研修での学びがモンゴルの職場に活かされている事例をいくつも知ることができました。研究をする中で、モンゴルの方が明言していたわけではありませんが、言語の壁がそもそも研修に参加できるかどうかに影響を及ぼしているということを感じました。国別研修はモンゴル語と日本語で実施されますが、一方で課題別研修は英語等のモンゴルの方にとっては第2言語で実施されるため、言語能力が参加の壁になっているように思えました。実際に、今回担当した助産分野の本邦研修の参加者も、英語はあまり話されない方が多く、教材も通訳もモンゴル語だったため、理解が得られやすかったという声が多くありました。英語等を普段使用しない国の人々にとって、母国語で研修を実施する意義を実感しました。

2023年3月にモンゴルに訪問した際には、病院視察する機会もいただきました。視察先の病院のひとつは国立第一母子保健センターという、年間に1万件以上の分娩がある、トップリファラル病院であり、様々なハイリスクケースにも対応していました。視察を通してモンゴルの産科の現場を学び、滞在中にモンゴルの生活や食べ物等について知ることもできました。今回の研修員の中には、視察した病院に所属されている方もおり、研修を企画・運営する際、そして研修中に研修員の方の疑問や発言を理解する際に、モンゴルに訪問した際の学びがとても役に立ちました。現場を知ることの重要性を改めて認識した経験でした。

本邦研修を企画・運営する経験を経て

実は、私は青年海外協力隊で派遣中に、カウンターパートが本邦研修に参加した直後に他の部署に異動してしまったり、隊員仲間からもカウンターパートが本邦研修に参加したものの、その際に作成したアクションプランは活用されている様子はないと聞いたりしたことから、本邦研修に対して懐疑的

でした。そのため、研修課に配属され、研修を実施する側に回るというのは複雑な気持ちでした。しかし今回、実際に研修の企画・運営を一から実施したり、他の担当者の研修について知ったり、研究も実施する中で、見方が変わりました。本邦研修に参加される研修員のおかれる状況について理解し、実情に合うように研修を計画・実施し、それをフォローアップすることは、開発途上国の課題解決に貢献し得るということが分かりました。また、各研修先での日本人医療者等と研修員との交流、意見交換は研修生だけでなく研修受け入れ先や関係者にとっても学びや気づきを得る機会になり、互いの文化を知る機会になるとも感じました。

おわりに

私は2021～22年にロータリークラブよりサポートいただき、イギリスに大学院留学していました。ロータリークラブが新生児蘇生に関するモンゴルへの支援を行った関係で、2021年にモンゴルのプロジェクトのミーティングに参加したことがありました⁵⁾。モンゴルの助産師さん方やプロジェクト専門家がいらしゃったこと、とても雰囲気の良いミーティングだったことをよく覚えています。留学後、協力局に入局し、同じプロジェクトの専門家と研修を企画・運営し、研究にも関与させていただいたことにとっても不思議な縁を感じるとともに、大変嬉しく思いました。これまでの様々な繋がりに導かれた

ような気持ちになり、どこでどんな繋がりが生まれるかは、わからないものだと実感しました。今回の素敵な繋がりと、関係して下さった皆様に、心より御礼申し上げます。

参考文献

- 1) ミッション・ビジョン・5つの戦略・5つの重点テーマ、国立研究開発法人国立国際医療研究センター国際医療協力局 <https://kyokuhp.ncgm.go.jp/org/priority/index.html>
- 2) 本邦研修、独立行政法人 国際協力機構 https://www.jica.go.jp/activities/schemes/tr_japan/summary.html
- 3) 【助産】助産分野の本邦研修「新人助産師教育の計画立案とその実際」の研修員に保健開発センターから研修員への期待が述べられました、ODA 見える化サイト、独立行政法人 国際協力機構 https://www.jica.go.jp/oda/project/1941062/news/1518145_45131.html
- 4) 【助産】新人助産師の研修プログラムを開発するためのワーキンググループが設置され、第1回のワーキンググループ会議・ワークショップが開催されました、ODA見える化サイト、独立行政法人 国際協力機構 <https://www.jica.go.jp/oda/project/1941062/news/20230824.html>
- 5) モンゴルにおける新生児蘇生法が大きく進展しました、プロジェクトニュース、独立行政法人 国際協力機構 https://www.jica.go.jp/Resource/project/mongolia/012/news/20190915_02.html

